

目が覚めたとき、最初はわからなかった。

なんとなく下半身が変な感じがする、という程度だった。寝ぼけた頭で手を伸ばして、固まった。

(……え)

紬は布団をはいで、パジャマのズボンを引き下ろした。息が止まった。

(なに……これ)

そこにあるはずのものが、ない。そこにはないはずのものが、ある。

恥骨の下に、割れ目がある。柔らかな粘膜が、蕾のように閉じている。指先で恐る恐る触れると、ぬるりとした感触が返ってきて、紬は声にならない悲鳴を上げた。

「っ！！??」

(なんで……なんでこんなことに……っ)

布団の上にへたり込んで、しばらく動けなかった。

霧ノ宮紬、二十二歳。大学を出て半年、事務職で働いている。男で、ずっと男だった。体は普通の男の体で、別に特別なこともない、どこにでもいる普通の青年だった。

なのに、なのに。

（病院！ 病院に行かないと……っ！）

これは、何かの病気だ。そうに決まっている。体の異変だから、まず病院に行くべきだ。紬はそう自分に言い聞かせながら、震える手でスマートフォンを取り上げて「突然 性器 変わった 病院」と検索した。

検索結果に「白澄クリニック」という名前が出てきた。専門的な精密検査に対応しているという説明があった。電話して、かろうじて今日の予約を取って、紬は着替えを始めた。

下着をつけるとき、いつもと違う感触があった。紬はぎゅっと目を閉じた。



白澄クリニックの自動ドアをくぐったのは、午前
十時少し前だった。

待合室はひっそりと静かで、受付の女性だけがに
こりと顔を上げた。

「こんにちは。本日は？」

「あ……さっき電話した、霧ノ宮、といいます……」

「霧ノ宮絢さんですね。お待ちしております」

名前を呼ばれただけで、なぜか顔が熱くなった。
ここに来た理由が理由だから。受付の女性には関係
がないのに、なんとなく全部わかれてしまいそう
で、絢は視線を落として小さく頷いた。

「少々お待ちください。担当医をご案内します」

ソファに腰かけて待った。五分もしないうちに、

廊下の向こうから足音がした。

「霧ノ宮さん？」

顔を上げて、紬は思わず瞬いた。そこに立っていたのは、体格のいい男だった。百八十センチ以上ある大柄な体格なのに、眼鏡越しの目がひどく穏やかで、顔立ちも甘くて、白衣がよく似合っていた。にこりと笑う顔に、なぜか緊張が少しだけほぐれる。

「担当医の陽人です。よろしくお願いしますね」

声も柔らかかった。

「……よ、よろしくお願いします」

「怖い顔しなくて大丈夫ですよ。何があったか、聞かせてくださいね」

陽人先生が隣に腰かける。大柄なのに、威圧感がない。それに安心しつつ、紬はおそろおそろ口を開

いた。

「き……今朝、目が覚めたら……体が……」

言葉が続かなかった。でも陽人先生は急かさなかった。ただ、穏やかな目でこちらを見ていた。

「……下半身が、変わって、いたんです。男なのに、その……おかしいところが……生えてて……」

「そうでしたか……。カントボーイ症かもしれませんね」

「カ、カントボーイ症……？」

「はい。男性器が女性器に変わってしまう、という症状です。実は最近症例が上がってきているんですよ」

「そうなんですか！？ で、でも、ニュースとかじゃ、そんなの……」

「まだ珍しい症状なので。今日は検査室でちゃんと確認しましょうね」

「は、はい……」

そう言って、陽人先生が立ち上がる。紬はその背中について行った。



検査室は白くて静かだった。

ベッドが一台。横に機器のついたカート。テーブルの上にいくつかの器具が並んでいて、紬は見ないようにした。

「検査着に着替えていただけますか？ 後ろ向いてますね」

「は、はい……」

陽人先生が壁の方を向く。紬は服を脱いで、薄い検査着をまとった。

「……終わりました」

「ありがとうございます♡ 検査台に横になってください。緊張したら言ってくださいね♡」

横になる。天井を見上げる。心臓がうるさい。

ドアが開いた。二人の男が入ってきた。

一人は背が高く、無表情で、タブレットを手に持っていた。整った顔立ちが、まるで人形みたいに表情を持たない。名札には「航」とある。

もう一人は、陽人先生とは違う種類の穏やかさを持った男だった。顔に笑みが浮かんでいて、一見すれば人当たりがいい。けれどその目の奥が、どこか楽しそうに光っていた。名札には「風磨」とある。

(……三人も来るの……?)

「こちらの二人も、精密検査に立ち会います。紹介しますね、航先生と風磨先生です」

「……よろしくお願いします」

航先生は小さく頷いた。風磨先生はにこりと笑った。

「よろしくね。珍しいケースだから、三人でしっかり診ますよ」

(珍しいケース……そりゃそうだ)

「では始めますね。検査着の裾を上げますよ♡」

陽人先生の声がした。紬は目を閉じた。検査着がめくり上げられる感触。下着が引き下ろされる。

「っ……」

声が出なかった。ただ、三人の視線が自分の下半身に向けられているのがわかって、顔に血が上った。

「……み、見ないでくださ……」

「視診は診察の基本ですよ♡」

陽人先生が穏やかに答える。心なしか、語尾が甘くなったような気がした。